令和7年度 高森町はたちの集い開催

1月3日に「令和7年度高森町はたちの集い」が開催されました。今年度は189名の皆さんが二十歳を迎えられました。式典には中学時代の恩師やご来賓の皆様にご参列いただき、対象者141名が参加し、二十歳の門出を盛大にお祝いすることができました。また本年度はご家族も式典に参加しました。式典終了後には中学時代のクラスに分かれ、恩師や旧友と近況報告や中学時代を振り返りました。祝賀会では中学時代に作成したプロモーションビデオを鑑賞し、実行委員会が企画したビンゴ大会も大いに盛り上がりました。二十歳を迎えられた皆さんの夢と希望あふれる未来と、今後ますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。この度は誠におめでとうございます。

たかもり
発行所
長野県下伊那郡高森町下市田　高森町公民館
発行人
芦部公一
編集
本館編集部
☎35−9416
印刷所
龍共印刷株式会社

はたちの集い 実行委員の皆さんの決意

はじまりのはたち

はたちの集い実行委員長　仲平 壮良

はたちの集い開催にあたりまして、ご協力いただきました皆様に心からの感謝を申し上げます。実行委員長でありながら至らぬ点も多くあったと思いますが、おかげさまで生涯忘れることのないような素敵な機会になりました。そして中学校卒業後に関わりがなくなってしまっていた同級生とも、再び縁を結ぶことができました。私たちはすでに十八歳で成人を迎えておりますが、二十歳が人生において大きな節目であることに変わりはありません。また一つのスタートと思い、これまで以上に「大人」としての意識を持って日々の学び、成長、そして縁を大切にしていきたいです。

二十歳の決意

中平 晨斗

この度二十歳という節目をこの町で迎えることができて、とても嬉しく思います。 私は、二十歳を迎え大人としての責任と自覚を改めて感じています。進路を考える中で生まれ育った町を離れ、専門分野を学び、目標としていた職に就くことができました。これまで支えてくれた家族や周囲の人への感謝を忘れず、社会人として日々努力していきます。未熟な部分も多いですが、失敗を恐れず挑戦を続け、心身ともに常に向上心を持ち続けていきます。二十歳という節目を大切にし、自分の選んだ道を信じて歩んでいきます。

二十歳を迎えて

松下 大和

この度二十歳という節目の年を迎えることができとても嬉しく思っています。また、私達を祝ってくださる式を開いてくださったことにとても感謝しています。ここまで成長できたのは色々なことを教えてくださった先生方、楽しい時苦しい時を一緒に過ごした友達、そして育ててくれた家族のおかげです。ここまで成長出来たことは当たり前のことではなく、私はとても恵まれているなと思います。私は今、自分の夢を叶えるために専門学校に通っています。必ず自分の夢を叶え今まで育ててきてくれた方々に恩返しをするとともに、自分が目指す大人になれるように頑張っていきます。

二十歳の節目に

神田 涼斗

この度二十歳という節目を迎える日に、母校で式典を開催していただき、とても光栄に思います。私は今年の春に短期大学を卒業し、学生から社会人として新たな一歩を踏み出します。今の自分があるのは、これまでお世話になった方々、そしてどんな時でも私を支えてきてくれた家族のおかげです。今まで自分の望む道を歩ませてもらった分、これからは少しずつでも恩を返していきたいと思います。まだまだ欠点の多い自分ですが、これからは社会人の一員として立派に成長して、一度の人生を自分らしく生きていきます。

感謝と決意

石原 桃菜

まず高森町ではたちの集いが開催できたことに喜びを感じます。また、支えてくれた家族や周りの方たちのおかげで、ここまで成長することができたと実感しています。二十歳になって大人としての責任も少しずつ実感してきました。現在私は地元の短期大学で看護を学んでいます。看護の勉強は大変だけれど、自分の選んだ道を歩けていることに誇りも感じています。今後は自分の行動により一層責任を持ちながら、少しずつ素敵な大人になっていきたいです。

成人を迎えて

山本 有奈

まず初めに、はたちの集いを迎えることができましたことに、関係者の皆様へ深く御礼申し上げます。そして生まれ育った高森町で、この節目を迎えられたことを嬉しく思います。この二十年間を振り返ると、多くの人に支えられ、助けられてきた時間であったと感じています。これまで至らない点も多くありましたが、それでも変わらずそばで見守ってくれた家族、支え合ってきた大切な友人、愛情を持って接してくださった先生方や地域の方々に心から感謝しています。現在は将来の夢に向かって勉学に励んでいます。支えてくださった方々への恩返しができるよう成長していければと思いますので、今後とも温かく見守っていただけましたら幸いです。

瑠璃寺・日吉神社 2年参り

大島山分館

12月31日は、月明かりの美しい穏やかな夜となりました。23時45分頃、瑠璃寺の瀧本住職が最初の除夜の鐘をつき、その音が厳かに響きました。ご住職の鐘に続いて、鐘楼前に並んで待っていた大勢の方々が順番に鐘をついていきます。それぞれの祈りを込めた除夜の鐘が響く中、瑠璃寺と日吉神社の2年参りが始まりました。

瑠璃寺本堂（薬師堂）と日吉神社が隣り同士に並んで建っている風景は、大島山区民にとっては見慣れたものですが、何故?と不思議に思われるかもしれません。

明治時代初めの「神仏分離令」により、多くの寺と神社が分離させられた中、薬師瑠璃光如来三尊佛をご本尊とする瑠璃寺と、その鎮守として祀られた日吉神社もその危機に遭遇しました。しかし、先人達の強い信仰心と知恵や工夫により、本堂と神社は同じ敷地内に並んで建つ、神仏習合の地として今に至っているそうです。そんな歴史を心に留めながらの2年参りもよいものではないかと感じます。

瑠璃寺の鎮守とされる日吉神社では、御神酒とみかんが振る舞われていました。御神酒を振る舞われた若者に「もう飲める年になったのかい」「うん、去年からもうグイグイいけるに…」そんな楽しいやり取りに笑いが起こり、和やかな空気が流れていきました。

日吉神社北側の天神様には、子どもさん連れの若いご家族も多く来られていました。

瑠璃寺の本堂では、ご住職と4名の総代さんによる大般若経転読が行われていました。経本を1巻1巻広げて流し読む様子に感嘆の声をあげる方あり、じっと見つめて聞き入る方あり。お参りを終えた方々は、暖かい甘酒の振る舞いを受け、大きな焚火の回りで暖をとりながら新年の挨拶を交わし合っていました。

大般若経転読が終わると、多くの方々が見守る中、結衆大地による太鼓の初打ちが奉納され、2年参りも終わりを迎えました。

新しい年が平穏で実り多い1年となりますように、祈願いたします。

元旦の恒例行事、中止に

下市田4区　山﨑 裕樹

下市田4区で毎年元旦恒例行事の漸進会主催、自治会・公民館共催による第35回元旦マラソン・ウォーキングの開催が今年も予定されていましたが、昨年12月22日の午前7時半頃、スタート・ゴール地点であった下市田4区生活改善センター付近でクマと思われる動物が目撃されたとの情報があり、執行部で検討した結果、参加者の安全を考慮し、大変残念ではありましたが元旦マラソン・ウォーキングは中止となりました。新年を迎えた最初の行事として毎年楽しみにしていた方にとっては、とても残念だったと思います。

遡ること昨年の11月上旬に牛牧浄化センター付近でクマと思われる動物が目撃されたとの情報があり、日頃近づくことのない場所ではありますが、下市田4区に住む私たちの家から比較的近いところだったため、組合内で情報共有を図りました。12月に入りクマも冬眠し活動が落ち着くかと思っていましたが、12月下旬に再びクマ情報があり、今度は、毎月常会を開催している会所付近で、子どもたちの通学路にも近く、身近過ぎる場所での情報であったため、非常に恐怖を感じる方も多かったのではないかと思います。

令和7年の漢字として選ばれたのは「熊」でした。その漢字が選ばれたのは、日本全国でのクマの出没が相次ぎ、日常生活や経済活動に影響が出たことが大きな理由だったようです。

クマが人里に降りてくる主な理由は、山での食料不足や人里の食べ物への誘引、そして里山の管理不足による生息環境の変化によって、人里との境界が曖昧になり、特に秋の冬眠前や若グマが新天地を求めて、人里に近づいてくることが出没の増加につながっていると言われています。

クマの活動範囲が来冬どうなるかわかりませんが、来年の元旦は、今年開催できなかった35回目の元旦マラソン・ウォーキングが実施できることを祈っています。

たゆまぬ歩みで紡ぐ、私たちの「ふるさと」
～変化の時代に、公民館ができること～

吉田西　中塚 文昭

窓の外に広がる河岸段丘の風景。柿のれんが揺れ、南アルプスが四季折々の表情を見せてくれる。この町で私たちが営む日常は、先人たちが大切に守り、育んできた知恵と情熱の結晶です。

しかし、現代社会は大きな転換期にあります。デジタル化の加速や少子高齢化、そしてライフスタイルの多様化。かつて当たり前だった「隣近所との助け合い」の形も、少しずつ姿を変えようとしています。

こうした変化の激しい時代だからこそ、今改めて「公民館」という場所の価値を見つめ直してみたいと思います。

公民館は、単なる貸館施設ではありません。そこは、世代を超えた人々が集い、学び、そして新しい「縁」を結ぶ場所のひとつです。趣味の講座で笑い合い、地域の課題を真剣に語り合い、時にはお互いの体調を気遣う。そんな何気ない交流の積み重ねが、いざという時に支え合える「地域の絆」を強く太くしていきます。

「自分たちの町を、自分たちで面白くする」

そのためのヒントは、いつも現場にあります。公民館で行われる1つひとつの活動が、高森町の未来を照らす小さな灯火(ともしび)です。誰にでも居場所があり、誰でも主役になれる。そんな「開かれた学びの場」であり続けるために、私たち1人ひとりに何ができるでしょうか。

体調や生活のリズムに合わせて、無理のない範囲で一歩踏み出してみる。その小さな一歩が、次の世代に手渡す「誇りあるふるさと」を創り上げる力になります。

公民館活動で笑顔の皆さんにお会いできることを楽しみにしています。

令和7年度 下平分館 カラオケ忘年会

下平分館　寺澤 優作

令和7年12月13日(土)午後5時より、毎年恒例の視聴覚部主催の分館カラオケ忘年会が行われました。

この時期は市田柿が忙しいこともあり予定を合わせるのが難しい中ですが、当日はたくさんの方の参加がありました。

視聴覚部より様々な料理や飲み物が並べられ、令和7年を締めくくる準備が整いました。

視聴覚部部長による開会のあいさつから始まり、来賓の地区長のあいさつ、分館長より一言頂き乾杯の後盛大に開催されました。

始めは和やかな雰囲気の中、食事や会話を楽しまれる方が多く恥ずかしさもあり、なかなか歌声を披露して頂けませんでしたが、徐々にお酒が入り1人2人と歌声が響いてきました。半ばに差し掛かると絶えず予約が入りデュエットを楽しまれる方もいて、終了時間をオーバーするほどの盛り上がりでした。

普段なかなか集まる機会が少ないですが、カラオケを通じ交流が深まり、1年の労をねぎらい名残惜しさの中閉幕になりました。

これからも毎年開催してもらい参加者が多くなる事を望みます。

クリスマス会とおやす作り

駒場分館

12月7日に、駒場地区育成会主催のクリスマス会とおやす作りが行われました。

おやす作りの講師に、毎年山崎さんをお願いし作り方を教わっています。子ども達にも分かりやすいように、ゆっくり丁寧に説明して下さり、大人も子どもも皆真剣に取り組めていました。

作り方以外にも、駒場地区にある子安神社の謂われも教えて下さりました。子安神社には、安産を守る子安神として、木花開耶姫(このはなさくやひめみこと)命が祭られているそうです。

なぜこの場所にあるのか、名前の由来なども教えて下さり、この地区の歴史も学べる、すばらしいお話を聞かせていただけました。

おやす作りが終わると、クリスマス会を行いました。育成会長さんから、差し入れをいただき、ケーキも食べて、楽しい時間が過ごせました。

その後は、お楽しみのゲームをやりました。

釣りゲームをし、ビンゴ大会では、なかなかビンゴの人が出ず、白熱したビンゴになりました。最後は、流れた曲に合わせて、プレゼントまわしをしました。

クリスマスとお正月のイベントを1回に2度楽しめる1日になりました。

「つどい・まなび・つながる」高森町公民館のさらなる飛躍を

高森町公民館長　芦部　公一

＜充実した学びの場・ひろがる町民のつながり＞

この一年間、本館では様々な事業を展開してきました。高森町の魅力を発見する春と秋の町歩きでは、下市田史談会の皆様と共催での史跡めぐりや、下伊那井上井月顕彰会の皆様との共催での井月句碑めぐりを多くの参加者の得て行うことができました。改めて高森町の隠された魅力を発見できたと好評でした。

公民館体育部主催のスポーツフェスは、小谷村子ども会育成会の参加も得て、幅広い年代層の皆様が集い、一緒にスポーツを楽しみ、汗を流す大会として定着してまいりました。参加者からは「久しぶりに体を動かして気持ちが良かった」「子どもと一緒に楽しめた」といった声も寄せられました。

公民館文化祭では、今回初めて高森町シニア大学皆様も学びの成果を披露していただくことができました。地域の皆様の充実した創作活動や趣味の成果を披露し合うことができ、互いの魅力を再発見する機会となりました。同時に行った公民館教養部主催の「手作り体験教室」にはたくさんの子どもたちが参加して楽しむことができました。

高森町シニア大学には80名を超える学生が集い、歌声、短歌、絵手紙、園芸、郷土歴史、マレットゴルフと、自分の得意分野を深めるとともに、多彩な講師を迎えた講演会では教養を深めることができ、まさに生涯学習を実現することができました。

支館分館行事でも、夏の納涼祭、ふれあい広場、敬老祭、運動会、スポーツ大会、演芸会などなど、それぞれ工夫された行事を行う中で、多くの町民が参加、交流してつながりを広め、深めていくことができました。

公民館活動の広報を担う公民館報発行は、支館分館の館報も含め、それぞれの編集部の皆様のご尽力によりその役割を果たしていただくことができました。

また、高森町コミュニティ・スクールでは、多くの町民の皆様に学校教育活動に参加していただき、未来の高森町を担う子どもたちのためにお力添えをいただくことができました。

＜さらなる広がりを深め、未来につながる公民館に＞

しかし、一方で課題も見えてきました。本館活動では、かつては図書部、視聴覚部、教養部、体育部、編集部と、社会の要請を受けて多彩な催しもの、行事を展開してきたわけですが、社会情勢の変化等で事業の変容や縮小を迫られてまいりました。

さらに、公民館役員や行事運営の担い手不足、若い世代の参加機会の少なさなどで従来の活動の維持さえ厳しい地区もあり、その公民館としての地域活動を持続させるためには解決すべき幾多の課題があることも明確になってまいりました。

高森町公民館は、支館分館も含め、単なる施設ではなく、地域の皆様の心をつなぐ拠点です。ここで交わされる笑顔や会話、協力の輪が、高森町の未来を形づくります。

そのためにも、今年度に引き続き本館専門部のあり方も含めて検討し、地域の皆様の声を大事にして、子どもからお年寄りまでもが幅広く、そして気軽に立ち寄ることのできる公民館を目指してまいります。

公民館より

この1年、行事に参加してくださった町民の皆様、支えてくださった本館、支分館の役員、委員、そして各団体の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。参加された皆様一人ひとりの「参加しよう」「支えよう」という思いの積み重ねによるものだと改めて感じました。公民館活動に参加された皆様の、明るく自然な交流の姿、輝くばかりの笑顔、公民館活動のすばらしさを感じた一年でした。来年度も変わらぬご協力とご参加をよろしくお願い申し上げます。

高森町公民館長　芦部　公一
高森町公民館主事　寺沢　浩之
矢澤ひな子

公民館報「たかもり」新企画！
#カメラロールの1枚

来年度の公民館報「たかもり」から、新企画「#カメラロールの1枚」の掲載を行います。みなさんのスマートフォンやカメラに残る何気ない日常の1枚を紹介しませんか？館報1号につき1枚の写真、ペンネーム、写真にまつわるエピソードを掲載します。下記QRコードからお気軽にご応募ください。お待ちしています！